


学 位 論 文 審 査 の 要 旨

論文提出者	長縄 鋼亮		
論文審査委員	(主 査) 朝日大学歯学部教授	式守 道夫	
	(副 査) 朝日大学歯学部教授	近藤 信夫	
	(副 査) 朝日大学歯学部教授	村松 泰徳	
論文題目			
微量末梢血を用いた口腔扁平上皮癌患者の全身免疫能評価			
<p><u>論文審査の要旨</u></p> <p>口腔扁平上皮癌 (oral squamous cell carcinoma, OSCC) の進行度診断は原発巣および転移巣のコンピュータ断層撮影 (computed tomography, CT) 画像診断、核磁気共鳴画像 (magnetic resonance imaging, MRI) 診断、超音波画像診断、細胞診断、生体組織診断 (生検) などによって得られる情報に基づいてなされる。しかしながら、既存の診断技術を駆使しても潜在的なリンパ節転移の診断などは困難なことが多い。本論文は OSCC 患者について インターフェロン-γ (IFN-γ) とインターロイキン-10 (IL-10) の値、IFN-γ と IL-10 の産生能、末梢血中 CD4⁺ CD57⁺ T リンパ球 (N-Th 細胞) の亜集団を検討し、病期、原発腫瘍径および所属リンパ節への転移との関連を解析した。</p> <p>方法としては、2009 年から 2012 年までの 3 年間に朝日大学歯学部附属病院口腔外科、朝日大学歯学部附属村上記念病院歯科口腔外科および横浜市立大学附属病院歯科口腔外科を受診し、本研究への同意が得られた 72 人の未治療 OSCC 患者を対象とした。実験方法の詳細は論文内容要旨の通りである。</p> <p>その結果、末梢血 IFN-γ 産生能は病期 I から病期 III への進行に伴い減弱したが、病期 III から IV への進行に伴い増強していた。病期分類のパラメーターを詳細に検討したところ、病期 I から病期 III への推移に伴う IFN-γ 産生能の減弱は腫瘍径の増大と拮抗し、一方、病期 III から IV で引き起こされる IFN-γ 産生能の増強は LN 転移との間に有意に関連することが明らかになった。また、N-Th 細胞の比率が腫瘍径の増大に伴って増加することが判明した。</p> <p>以上の結果から、本研究で示す末梢血中の IFN-γ 産生能および N-Th リンパ球の動態は、OSCC の病態解明や新たな診断技術の開発に有益な知見を提示することが明らかとなった。したがって、本研究結果は歯科臨床に極めて価値のある所見を提供したものであり、審査委員は博士 (歯学) の学位を授与するに値するものと判定した。</p>			